

特別寄稿

教員

研究にタブーはない

建築都市空間デザイン部門 都市防災学研究室

岡田 成幸



北工会誌に寄稿の機会を与えられました。2000字程度との条件がありますが、長いのは読まれない（と勝手に思っています）ので短文とさせていただきます。

表題は、学生を含む若い研究者へのエールのつもりです。最近は何かと規制が厳しくなり、研究に制限がかかりがちですが、誤解を佈れずに言うなら「研究（の根本）にタブーはない」。テーマや対象の選択、方法論、テリトリーなどの境界を破る挑戦者意識を畏れず、怖がらずに持ち続けていただきたい。

たとえば「制御不能な技術」はマスコミ等でたたかれ不要論が高まりますが、研究として未熟なレベルにあるだけの話であり、見方を変えれば、伸び代が大いに残っている研究対象。たとえば話が原子力発電。技術ではないが、制御不能と言えば経済、民族紛争、政治だって制御不能、そして軍事転用の代表者。工学的発想で言わせてもらえば、これらは未だ研究段階のものであり、实用レベルに達していないだけのこと。ついでに「技術の軍事転用への危惧」について補足するなら、本質的にはユーザーを制御できない政治の問題であって、技術を危惧するような扇動は技術者への一方的な責任転嫁のようにも思えます。マスコミによる不要論で、優秀な若者がその技術に興味を持たなくなるの方が、人類にとって大きな損失と言えましょう。蛇足ながら、最初から軍事目的で技術開発している輩は端から技術者としてここでは認めてはいません。技術者とは技術の到達点（＝人類の牽せ）を常に目指している者であり、その到達点が軍事（＝人類の一部を満足させる技術）であるはずがないからです。軍事均衡が戦争を防ぐ最良手段だと言って軍事技術開発を煽るのは工学的発想ではありません。こんなに不安定な解を工学者は好みません。

高齢者による交通事故多発防止策として、法令による年齢規制と自動運転技術開発のどちらが優れた案かと言えば、利便性・安全性・将来性において技術開発に軍配を上げたい。即効性と賠償責任を優先させるなら法令規制でしょうが、その選択は人間の本質を見逃してい

ると思います。人間は一度得た益（車の利便性）は放したくない、人間の本質は遊び心（車で遊ぶ）にある。正に、ホイジンガが提唱した「ホモ・ルーデンス」の人間観ですが、人間の本質を忘れ、建前だけが先行するとあり得（てはいけ）ない世界像が描かれていきます。人間本位のポジティブな未来は技術者が担っているのです。北大工学部・工学院のチャレンジ精神に期待します。

追記：

上記拙文は2016年度の北工会誌に寄稿したのですが、その後私は歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリのサピエンス全史を読む機会を得て、そこに臍に落ちる一文を発見しました。原文は長いので要約すると以下のようなことが書かれていました。

「科学技術はこれからの社会を決定づける大きな力（生命の寿命や新しい生命創造にまで関与できる力）を持つに至った。しかし、どのような社会を築くべきかに答える資格は、科学技術にはない。我々がどのような社会を望むか、それが第一義的に優先される。その選択肢を作り出すのは科学技術であるが、選択するのはイデオロギーであり、決定するのは政治であり、それを支える資源を出すのは経済である。」

誤解しないでください。科学技術に未来を決める権利がないことを強調しているわけではありません。未来を決めるのは人間（我々技術者を含む人間としての総体）であり、「何を望むか」という哲学（イデオロギー）だと言うのです。世界が科学革命を迎えた今、工学（科学技術者）はこれからの未来を決める選択肢を作り出す権利があり、それが義務なのです。なんてすばらしい権利ではないでしょうか。タブーを恐れず工学に関わることができる今の環境を誇りにしてください。